

共に考える 住宅デザイン

○79○

甲斐 徹郎

「樺ハウス」の価値

前回(No.74 11月19日付)の本欄で、自己完結型のライフスタイルを追求する価値観に限界が見え始め、「個人のプライベート」と「コミュニティ」のそれぞれの良さを両立させる、新しい価値観へシフトする必要性があるという点を指摘しました。そして、その実践例として、私が企画・コーディネートした環境共生型コーポラティブ住宅「樺ハウス」が、今年九月に竣工したことをご紹介しました。

今回は、この「樺ハウス」が、そうした新しい価値を追求するために、どのように計画されたかについてお話しします。

地主の環境保全事業からスタート

「樺ハウス」は、相続によって切り売りされた地主宅の庭の一角に建てられました。通常であれば、切り売りされた土地は地主宅とは無関係に細分化され、樹木は伐採され、環境は分断されて

「自然の空調装置」

樹木で生活環境高める

しまいます。しかし、「樺ハウス」では、樹木を残したいという地主の思いから、既存樹木を生かした計画を実現しています。

土地の権利関係は変わっても、環境の連続性を保つことで地主にとって、元と変わらない環境を残すことができたのです。地主にとっての生活価値を高めるための戦略としての位置づけが、このプロジェクトの

出発点であり、この発想が、都市環境を残し、再生するというテーマに対応した事業を生み出しました。

「コミュニティ・ベネフィット」

都市部で既存の環境を保全することは、個人単位では難しくなっています。そこで、「樺ハウス」では「個人で住まい

「同じ価値観を持つ人々」の共同事業で実現させたいです。こうした考え方は私は「コミュニティ・ベネフィット」と呼んでいます。それは、コミュニティを目的とするのではなく、手段として位置づけ、一人では得られない「価値(ベネフィット)」を実現させようという考え方です。

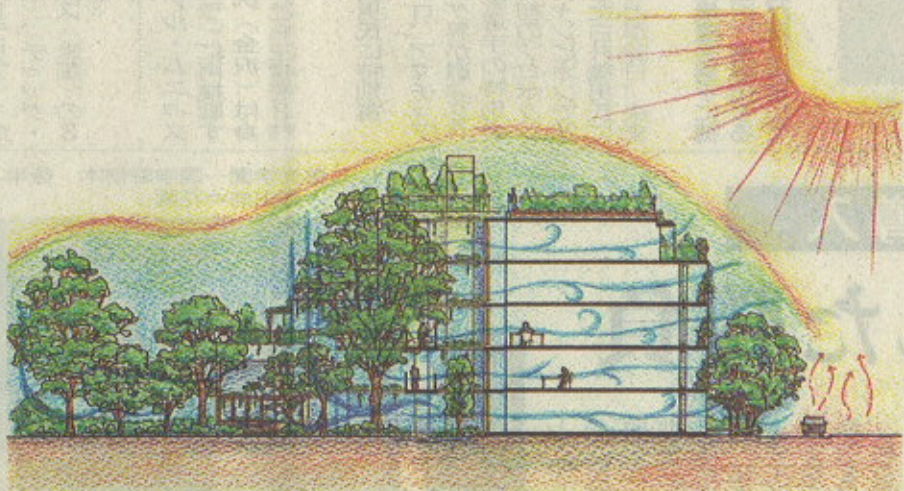
土壌の権利関係は変わっても、環境の連続性を保つことで地主にとって、元と変わらない環境を残すことができたのです。地主にとっての生活価値を高めるための戦略としての位置づけが、このプロジェクトの

出発点であり、この発想が、都市環境を残し、再生するというテーマに対応した事業を生み出しました。

「コミュニティ・ベネフィット」

都市部で既存の環境を保全することは、個人単位では難しくなっています。そこで、「樺ハウス」では「個人で住まい

「同じ価値観を持つ人々」の共同事業で実現させたいです。こうした考え方は私は「コミュニティ・ベネフィット」と呼んでいます。それは、コミュニティを目的とするのではなく、手段として位置づけ、一人では得られない「価値(ベネフィット)」を実現させようという考え方です。



「樺ハウス」の断面イラスト(制作・宮本隆雄)



室内環境の快適化を図るための空調装置として整備された「緑の環境」と、それを取り囲む15世帯の入居者たち(撮影・斎藤亮一)

「樺ハウス」では、既をつくる」という方法で存の豊かな樹木環境をこは実現できない価値を

「緑の環境」と、それを取り囲む15世帯の入居者たち(撮影・斎藤亮一)